

天台宗檀信徒祖山参拜研修会受講記

結縁灌頂の儀式及び群馬教区研修会

平成21年10月29日～31日



金剛院檀信徒会伝道師 須藤 充



修了証

群馬 教区

金剛院 檀信徒

須藤 充 様

あなたは平成21年10月29日から30日
までの間実施した、第38回天台宗
檀信徒祖山参拝研修会の所定の
課程を修了したことを証する

平成21年10月30日

天台宗務総長

権大僧正 濱 中 光



天
台
宗



第38回天台宗檀信徒祖山参拝研修会

平成21年10月29日～30日

平成廿一年十月三十日

結緣灌頂入壇



授與

須

藤

克

比叡山延曆寺

証



結緣灌頂入壇

投基得佛

釋迦牟尼如來



一見曼荼羅業障摧滅當來世得成佛
自今宜加護法精進肝要也

延曆寺大阿闍梨存淳



不



釋迦牟尼如來



延曆寺

比叡山

群教宗発第197号
平成21年10月8日

天台宗檀信徒祖山参拝研修会
参加者各位

群馬教区宗務所長 藤井 祐順

第38回 天台宗檀信徒祖山参拝研修会のご案内

錦秋の候、各位には益々ご清祥の事とお慶び申し上げます。
平素、菩提寺の護持と、教区、天台宗発展のためにご協力を頂き、心から感謝致しております。

さて、この度、数多くの檀信徒の中から菩提寺の住職の推薦により、檀信徒祖山参拝研修会にご参加されますこと、心からお慶び申し上げますとともに、下記の通りご案内を致します。

1200年の靈氣と、千古の老杉の息吹につつまれた比叡山に登られ、研修をなされますことは誠に意義深いこととございます。現代問われているのは人の心でございます。各位には寺院檀信徒として、菩提寺の住職をたすけ、宗祖傳教大師の「一隅を照らす」ご精神宣揚の宗教活動が活発に展開できますよう、今後とも特段のご協力をお願い致します。比叡山は朝夕冷え込みますので、充分ご健康に留意されますようお願いいたします。

記

1. 研修期日 10月29日(木)～10月31日(土)
10月30日午後より10月31日は教区研修
1. 集合出発 10月29日 朝5時45分集合、6時00分出発
1. 集合場所 群馬教区宗務所(別紙地図)
1. 交通機関 往復貸し切り中型バス使用(上州観光バス)
1. 参加者 天台宗檀信徒10名程度
1. 日程 別紙 出発当日の朝食は各自でご用意下さい。

第38回天台宗檀信徒祖山参拝研修会 並び群馬教区研修会 連絡事項

このたびは、檀信徒祖山参拝研修会に、ご参加頂きましてありがとうございます。
つきましては、下記事項についてご連絡申し上げます。

記

- ◎ 今回の研修参加者は10名程度の予定です。
- ◎ 往復路とも中型バス利用です。
- ◎ 出発当日の10月29日は高崎市中尾町1261番地、天台宗群馬 教区宗務所に**午前5時45分までに集合**して下さい。(駐車場有)
- ◎ 往路の昼食は準備致します。(出発当日の朝食は各自でご用意下さい。)
- ◎ お**袈裟・念珠・筆記用具・洗面具**をお持ち下さい。(但し お袈裟・念珠のお持ちでない方は結構です。)
- ◎ 服装については、今回は特に**結縁灌頂**がありますので、**背広ネクタイ着用**をお願いします。(行き帰りの車中は自由です。)

尚、ご本山の研修日程は、29日午後2時より30日の午後1時30分までですが、その後群馬教区研修として 長野県飯田方面の参拝等を予定しておりますので、ご承知おき下さいますようお願い致します。

☆ 気候不順のおり、**薄手のセーター等を用意**し、特に体調には充分にお気を付けて下さいますようお願い申し上げます。

引率者	天台宗群馬教区檀信徒会事務局長	法輪寺	三	浦	興	優
	同	事務局次長	光明寺	今	村	孝
	天台宗群馬教区宗務所教務主任	最勝寺	林		行	弘

不明の点は、天台宗群馬教区宗務所 ℡027-362-5620
または、林 行弘 携帯電話090-3060-3598 までお問い合わせ下さい。

第38回 天台宗檀信徒祖山参拜研修会参加者名簿

(平成21年10月29日～10月31日)

群馬教区

番号	氏名	郵便番号	住所	電話番号	性別	年齢	受戒数	部名	寺院名	二泊目部屋割り
1	関根定夫	せきねさだお 379-2123	前橋市山王町79	027-266-1650	男		0	南前橋	禪養寺	453
2	井草弘行	いさひろゆき 370-0018	高崎市新保町283	027-363-3145	男	69	0	西前橋	昌栄寺	453
3	渡辺正二	わたなべしゅう 370-0864	高崎市石原町1366	027-322-3032	男	68	0	高崎	石昌寺	453
4	飯野兵作	いひのひょうさ 377-0005	渋川市有馬494	0279-24-0181	男	72	1	北群馬	神宮寺	455
5	柴崎芳郎	しばさきよし 377-0005	渋川市有馬1251	0279-23-6557	男	70	1	北群馬	神宮寺	455
6	武井善太郎	たけいぜんたろう 378-0056	沼田市高橋場町4968-5	0278-24-0435	男	62	0	沼田	金剛院	456
7	堤 信也	つづみしんや 378-0018	沼田市殿治町963	0278-24-2618	男	60	0	沼田	金剛院	456
8	須藤 充	すとうみつる 378-0051	沼田市上原町1756-145	0278-23-4756	男	64	0	沼田	金剛院	456
9	矢内忠作	やないちゆうさ 372-0001	伊勢崎市波志江町3369-1	0270-21-3738	男	69	0	伊勢崎	金蔵寺	455
10	田村眞泰	たむらみちや 370-0132	伊勢崎市境平塚867	0270-74-2867	男	68	0	世良田	天人寺	457
11	関根義	せきねよし	伊勢崎市境平塚1102	0270-74-2091	男	67	0	世良田	天人寺	457
12	市川圭三	いちかわけい 370-2806	南牧村大日向1513	0274-87-3322	男	66	0	下仁田	安養寺	457
13	市川雅雄	いちかわまさ 370-2806	南牧村大日向1071	0274-87-4362	男	67	0	下仁田	安養寺	457
引率	三浦 興優	みうら せいゆう 370-0055	高崎市羅漢町72	027-323-2224	男			高崎	法輪寺	458
〃	今村孝道	いまむらこうだ 370-2452	富岡市一ノ宮227	0274-63-7065	男			富岡	光明院	458
〃	林 行弘	はやし ぎょうこう 376-0023	桐生市錦町2-14-31	0277-44-7709	男			桐生	最勝寺	458

御 旅 行 行 程 表

平成21年9月4日
群馬県知事登録旅行業第2-272号
群馬県前橋市舟町三丁目21番地のB
上州観光サービス株式会社前橋営業所
総合旅行業務取扱管理者：五十嵐彰
担当：小林大介
TEL:027(243)2626/FAX:(221)3193

天台宗群馬教区檀信徒比叡山研修会 様

御 旅 行 先	旅 行 期 間	参 入 数	ご利用観光バス
比叡山、屈神温泉	平成21年10月29日(木)～10月31日(土)	20名様	上州観光バス中型(27名乗り)1台
日次	行 程	備考/利用施設名	
1 10月29日 (木)	天台宗群馬教区＝前橋IC、＜関越道＞、藤岡IC、＜上信越道＞、東部湯の丸SA(休憩)、更埴IC、 (免)6:00 ＜長野道＞、榑川SA(休憩)、西谷IC、＜中志道＞、駒ヶ岳SA(休憩)、小牧IC、＜名神道＞、		
	多賀SA(自由屋敷)、京越東IC＝＜比叡山ドライブウェイ＞＝比叡山延暦寺会館(到着、宿泊) (着)13:20頃		
2 10月30日 (金)	比叡山延暦寺会館＝＜比叡山ドライブウェイ＞＝京越東IC、＜名神道＞、栗老SA(休憩)、小牧IC、 (免)13:00 ＜中央道＞、黒原IC＝屈神温泉(宿泊) (着)16:30頃		屈神クラントホテル天心 TEL0265-43-3434
3 10月31日 (土)	ご宿泊場所＝信濃比叡(根本中堂・広経院講摩堂等を見学)＝飯田市＝ (免)8:30 9:00～9:45頃迄 ＝水引工芸館(見学)＝元善光寺(見学)＝松川IC、＜中央道＞、駒ヶ岳SA(自由屋敷) 10:15～10:45頃迄 11:05～11:50頃迄 12:20～13:00頃迄 伊豆IC＝＜権兵衛トンネル＞＝ 奈良井宿(日本の木曾路宿場町を散策)＝塩尻IC、＜長野道＞、 14:00～15:00頃迄 碓氷SA(休憩)、＜上信越道＞、榑川SA(休憩)、＜関越道＞、前橋IC＝天台宗群馬教区 (着)19:30頃予定		

※上記行程は道路状況、天候などによって時間等が変更になる場合があります。



中央道関原 I C・怪神温泉・飯田市・奈良井宿周辺図



天台宗壇信徒祖山参拝研修会受講記

【結縁灌頂の儀式及び群馬教区研修会】

金剛院檀信徒会伝道師 須藤 充

はじめに

菩提寺・金剛院のお勧めで、比叡山延暦寺で行われる「第38回天台宗壇信徒祖山参拝研修会ならび群馬教区研修会」に参加することになった。金剛院副住職によると、すでに伝道師となっている人を順送りで参加してもらうということである。そのご指名をいただいたのが金剛院檀信徒会で共に世話人としてご一緒している堤信也氏、武井善太郎氏そして私の3人である。

特に、今回の研修会では「結縁灌頂（けちえんかんじょう）」があるので、背広ネクタイ着用とのことである。この「結縁灌頂」とはいったいどんな儀式なのかもわからないまま、体験により修得することとした。研修成果が、自分の行いの中で少しでも活かされることを願いながら、研修で見聞を広めた事柄や研修過程で感じたままの思いを記した。

比叡山へ向かう

研修期間は平成21年10月29日から31日までの3日間である。1日目が講義研修、2日目が「結縁灌頂」である。2日目の午後から3日目が群馬教区研修会で長野県飯田方面とある。

1日目は朝5時45分に群馬教区宗務所に集合、6時出発である。そのため、朝4時40分、私たち3人は武井氏の車で沼田を出る。宗務所に着いた頃はまだ暗く開門されていない。しばらくして引率者やバスが到着する。席は自由で指定はない。中型バスで小人数、しかも席の間隔が広いためゆったりだ。

予定時間前に出発する。通知文では参加予定10名程度とあったが、実際の参加者は12名であった。引率者は、群馬教区檀信徒会事務局長三浦興優師（高崎部・法輪寺）、事務局次長今村孝道師（富岡部・光明院）、宗務所教務主任林行弘師（桐生部・最勝寺）の3名で、この方々に3日間お世話になる。

車中、あいさつやら参加者紹介、資料説明などが行われる。バスは関越道から上信越道をひた走る。目的地は遠いが、流れるように過ぎていく車窓からの景色を地図と見比べたり、同行者と語り合ったりして時が過ぎる。

朝7時、上信越道「東部湯の丸SA」のコンビニでは、早朝のためまだ納品がなく、食堂で今朝作った握り飯を勧められた。これがコンビニものよりうまかった。ひよんなことでSAでの握り飯の買い方を知ることになった。

車中頃合いをみて、比叡山参拝研修の気分を高める意味から、私が持参した北島三郎が歌う「比叡の風」のテープをかけてもらう。歌詞カードを配ってみんなにも口ずさんでもらう。

バスは長野道の梓川、中央道の駒ヶ岳、内津峠のSAでの休憩をとり、名神高速道へ入る。11時45分、名神道の多賀SAで自由昼食だ。事務局から渡された所定の金額で思い思いにレストランで食事をする。弁当の配布よりいい。引率者も食する側もいいやり方だ。

比叡の風

唄：北島三郎

あゝ 比叡の風に 響く朝	あゝ 捧げ尽くさん この命	照らす一瞬 衆生のために	伝え広めた 聖のおしえ	国の宝は 人づくりだと	せめても願うは 慈悲ごころ	あゝ あつて不思議は ないけれど	人の世なれば 悩みや欲も	月の姿も 心を映す	満ちるも欠けるも 見る人次第	あゝ 不滅の法灯が いま照らす	あゝ 無我の心に 咲く花を	あゝ 荒行千日 比叡の風を 受けて歩いた 山道万里
--------------------	---------------------	-----------------	----------------	----------------	------------------	------------------------	-----------------	--------------	-------------------	-----------------------	---------------------	---------------------------------------

研修1日目は講話

名神道・大津SAで最後の休憩。琵琶湖が眼下に広がり、比叡の山並みも近くに見える。(右写真・武井氏と)

京都東ICで高速から一般道に下りる。やがて比叡山ドライブウェイに入り、バスは右へ左へとカーブをくねりながら登っていく。延暦寺バスセンターでバスを降りると、徒歩で大講堂、平和の鐘楼を経て1



3時40分ごろ延暦寺会館に着く。早朝からバスだったので、この程度歩くのは心地よい運動である。

開会式前に講師を含め参加者の記念撮影がある。120人ほどの人数を一度に撮影する。一人ひとりの顔は米粒のようだ。(巻頭掲載)



研修会場(写真左)は延暦寺会館の大ホール比叡である。名簿番号の席に着く。名簿では全国各地から100名を超える人たちが来ている。

壇信徒研修会への参加は初めてだが、これほど規模の大きい研修会とは思っていなかった。その中の2割ほどが女性である。地方によって参加はまちまちで、北海道を含む新潟以北に参加している県名が少ない。

第1日目（10月29日・快晴・温暖）の日程は次のとおりである。

13:30	受付開始	
15:00	開会式・日程説明・注意事項	
15:45	説戒「結縁灌頂について」	(休憩)
17:00	講話「座禅止観について」	
16:00	夕食（レストラン湖望）	
19:00	講話「比叡山の行」	
20:30	入浴・就寝	

説戒「結縁灌頂について」 （説戒師：延暦寺副執行 小堀光實師）

伝教大師の大切な教えが二つある。「説戒」とは心得を説くことであり、「授戒」とは心得を守ることである。一番大切なことは殺生しない約束ができるかということである。今日まで精いっぱい生きてきたか。「生」とは「命」のことである。生を受けて生きること、生活とは命を活かすことである。

「結縁」とは仏様との出会いである。「結縁灌頂」とは、仏様と縁を持って仏様の力を借りて生きることである。（これが今回研修のメインテーマである。）

今まで生きるために悪いことをしてきたかもしれない。その「悪」をあらため直していくことが「懺悔」である。

「善」に向けて努力しますというのが「反省」である。反省の「反」は繰り返すということで、自分自身を何度も振りかえり前向きな行いを誓うことを「懺悔」という。

「灌頂」とは仏様の智慧の力の水を頂くことである。仏様と出会った最極の場所である。その証明を授けられたら、家の大切な場所に捧げることである。

「法」を伝えるのも「灌頂」である。毎日の食事をする作法が生活の中で正しく伝えられているだろうか。「いのちを頂きます」を唱えて食する。食した後「ごちそうさまでした」を言う。走り回って採りそろえた食材を調理して食する。「いただく」ことに対する感謝の言葉である。こうした教えを家族に伝えることを「伝法灌頂」という。



坐禅止観について (延暦寺会館 渡辺主任)

坐禅には「坐」の字を用いる。人と人が土の上に坐って向かい合うことである。「禅」は自分を示すことであり、「禪」は自分を見つめることである。

「止観」とは見つめることである。「呼吸」を大きく深い腹式呼吸をする。「縦」の呼吸で、へその下の「丹田」を意識する。次に腹の中の空気を全部吐き出す。そして「心」を整え、平静心を保ち「心」を一定にする。呼吸の数を数えることに意識を集中させる。坐禅の途中で禅杖を受ける。「合掌→一礼→肘を抱える→禅杖(左右2回)→合掌→一礼」で終わる。

1日の中で自分を見つめる時間を持つことができる生活が望まれるが、実際には1日の生活が忙しいことに追われてしまう。「忙」とは「心」が「亡く」なることである。心に余裕がないと人に与えることができない。相手のことが考えられなくなってしまう。心に余裕を持つことを心がけることが大切である。

食時こそ礼の始まり (延暦寺会館大食堂)

午後6時から夕食である。定刻前に食堂に向かう。全員がそろそろまでテーブルに着座して待つ。女性グループがしんがりだ。

全員着座したところで、担当僧侶から食時についての話がある。箸をとる前に箸袋の裏に記されている「食前観」を僧侶に従って唱える(写真右)。

食物を食べられることに感謝していただくのが「礼」の始まり

という。それぞれのお盆の器には食欲をそそる品々が盛られているがすべてが精進料理である。その見事な出来映えに、料理人の真心がこめられていることを思いおいしくいただく。

全員が食事を終わるのを待って「食後観」を唱えるわけなのだが、女性グループが食することが遅いのおしゃべりが多いために皆のペースに合わせられない。女性を抜きにして「食後観」を唱える。女性が社会的な位置づけをうんぬんする前に、女性自身が甘えの構造から脱却しない限り、その確立は難しいものがあると思う。



講話「比叡山の行について」 (延暦寺一山 最乗院住職 高川慈照師)

夕食後、午後7時から夜間の部が始まる。欠席者もなく、席に着く。丸顔の温和そうな講師が紹介されて話が始まる。

人の寿命について考えたとき、生きる目標を持つことが大切であるということに行き着いた。母の言うには、人間は1円玉のようなもので表も裏も同じだという。テレビは見ずにラジオを聴く生活の年寄り、ラジオ放送で時間がわかる。社会のニュースにも明るい。頭が働くのでボケないという。日常生活の中でボケないように努力することが大切だという。身近に年寄りがいたらぜひ勧めてもらいたい。

私は、昭和43年正月に比叡山に上ってきた。(師の年齢64歳から逆算すると23歳の頃と思う)理由は比叡山の修行のひとつである十二年籠山行に興味



を持ったからである。自分の仕事を生きがいに感じることができるか。生きがいを持てるものはいったい何なのか。

比叡山に来たときの師匠が回峰行の先生だった。何が人生の生きがいなのか。不動寺で育ったが43年に籠山行に転向した。三十四仏礼拝を繰り返し行い、仏さんの姿が見えるまで行を続けることの難儀がある。

ムカデはなぜあれだけの足を繰って歩けるのか。それは無心であるということに気がついた。しかしムカデにとっては無心になること自体が無用なのだ。ムカデは元から無心なのだということに思いが至った。

大人の声は耳障りだが子供の声は耳障りではなく、小鳥の声のように聞こえる。自分の意識を変えてみると、無心などどうでも良くなった。相手が邪魔ではなく、自分の心が妨げであったことがわかった。騒音も気持ちよいものになっていった。

この行をやって悩むことが少なくなった。人のいうことも気に留めなくなった。聞き流してもあまり影響がないことがわかってきた。暗い堂内の花瓶に活けたユリの花が、最悪の環境の中で凛とした姿で咲き出すのを見て、人間だったらこうしたことはできないだろうと思った。

これこそが生きがいではないだろうか。自分の存在を大切に生きることこそ、生きがいを持つということではないだろうか。いま生きているときに自分の力

を発揮することこそが生きがいといえるだろう。

「常行三昧」は念仏を唱える行である。念仏には功德がある。誰にでも唱えられるから、できない理由にはならない。行は休むことはできない。休めば行にはならない。行が足りずに奈落に落ちたとき、仏に助けを乞い仏に助けられたことから、仏の力を真に受け止めることができた。

他の人が悪いのではなく、自分が醜い心に悩まされているのだ。善行は人間の因縁によって現われるものである。

入浴・就寝

午後8時40分、研修1日目の夜の部がようやく終了した。荷物をまとめて割り当てられた部屋に向かう。沼田3人と渋川2人の5人同室である。

時間が遅いので、会館の大浴場で湯浴みをして1日の疲れを取る。浴場の大窓から見る琵琶湖の夜景は、宿坊にいるとは思えないほど素晴らしい。明朝は5時起床だが、他の宿泊者もいるため館内放送はしないということなので、モーニングコールを4時45分に頼んでから寝床に就く。長い1日がようやく閉じる。



研修2日目は結縁灌頂の儀式

第2日目（10月30日・快晴・温暖）の日程は次のとおりである。

- | | |
|-------|--------------|
| 5:00 | 起床 |
| 5:20 | 会館前集合 |
| 5:30 | 坐禅止観（根本中堂） |
| 6:30 | 朝事おつとめ（根本中堂） |
| 7:15 | 朝食（レストラン湖望） |
| 8:00 | 集合（会館前） |
| 8:15 | 国宝殿拝観・灌頂堂へ移動 |
| 8:30 | 結縁灌頂（灌頂堂） |
| 11:00 | 閉会式（大ホール） |
| 11:30 | 昼食（レストラン湖望） |
| 12:00 | 解散 |

坐禅止観と朝事おつとめ

モーニングコール以前に目覚める。体育着に着替え洗面をすませ、輪袈裟を掛けて、同室者と一緒にフロントに下がる。まだそれほどの人数は来ていない。大ホール前に用意してある坐禅用の座布団を持つ。

まだ薄暗い早朝5時20分、玄関前に皆が集まったところで根本中堂に向かう。ひんやりとした空気感が身を引き締めて気持ちよい。根本中堂前でひととおりの作法を聞いてから靴を脱いで中にすすむ。その昔から多くの人たちが歩いた回廊の床板が、足の裏に滑らかでひんやりした感触を伝える。

静まりかえった早朝のお堂の中にいるのは、私たちだけだ。参拝者用の中陣である。中陣から内陣を覗き込むと、内陣は1間半ほど下に位置している。厨子などが据え置かれ、「不滅の法灯」が静かな明るさを放っている。その薄暗い内陣で、朝事おつとめの準備に僧侶が忙しく立ち回っている姿が見える。

私たちは僧侶の指示に従って、坐禅止観の体勢を整える。背筋を伸ばし呼吸を深くする。半眼にして手に法印を結び、心を鎮めて瞑想に入る。無心になるとすべてのこだわりから開放される。そんな静寂の中に、突如として「ピシッ」という禅杖を打ち込む音で、無心が解かれる。すっきりとした気持ちになる。

6時30分、内陣の底から僧侶たちの厳かな読経の声が響き渡ってくる。「朝事おつとめ」である。座禅止観の後に来る僧侶の読経の響きで、身も心もすべてが洗い清められた思いになる。私たちも「般若心経」を唱え、僧侶からのお説教をいただき根本中堂を出る。



巡拝案内役は山本光賢師

根本中堂から会館に戻り大食堂で朝食となる。食時作法は昨日の夕食と同じである。部屋に戻りスーツに着替える。その上に、支給された白地木綿一重のちゃんちゃんこを羽織る。襟には比叡山延暦寺の文字が、そして背中にはそれぞれ異なった御朱印が6個捺されている。



延暦寺会館の玄関前で、A班（1～49）とB班（50～105）に分けられる。群馬は後組のB班で、東塔施設拝観の後に灌頂堂に入る。出発前のひと時、思い思いに写真を撮り合う姿が見られる。（前頁写真・武井、私、堤氏・延暦寺会館前で）

B班の案内役は延暦寺副執行の山本光賢師である。平成19年10月、私が伝道師研修を受講したとき、この僧侶が研修道場「居士林」の所長を担当されていた。にこやかに誰とでもへだてなく接しられ、とても面倒見の良い方である。伝道師のお授戒がすみ「釈迦堂」を出て「にない堂」へ向かう上りの石段



の中ごろで、釈迦堂を背景にこの山本光賢師と2人で撮らせていただいた記念写真がある。私が執筆した「伝道師補任研修受講記」の中に記念ショットとして掲載してある。（左写真）

副執行になられた山本師は、「肩書きなどは関係ない」といった按配で、その当時と少しも変わっていない。明るく闊達で話も上手だ。案内の頃合いをみて伝道師研修会でお世話いただいたお礼を述べると、とても嬉しそうに返された。

延暦寺書院・大国堂・萬拝堂を拝観

施設拝観の始めは「延暦寺書院」である。延暦寺書院は昭和初期に、天皇や外国高官の迎賓館に当てるため、東京にあった旧村井邸を移築したという由緒ある歴史的建物だ。敷地内に入り書院すぐ右手に祀ってお宮の説明がある。

玄関で靴を脱ぎ、畳敷きの玄関から廊下を進むと、名のある方々の書かれた書画が掲げてある。国家安泰を祈願する「鎮護国家」や比叡山修行の厳しさを示す「論湿寒貧（ろんしつかんびん）」などの額がある。

書院はずいぶん奥が広く、和風様式として迎賓館の名に恥じないものを感じる。山本師は説明しながら奥へ奥へと歩を進めるので、うっかりすると折角の説明を聞き漏らしてしまう。





書院を出て根本中堂へ下る手前に「大黒堂」がある。このお堂には、伝教大師自作の「三面大黒天」が祀られていて、信仰が厚いという。日差しの強いお堂の前で説明を受ける。(写真左)

続いて筋向いにある「萬拝堂」に入る。堂内は、千手観音菩薩を本尊として祀られていると聞く。千手観音菩薩は私の干支の守り本尊であることから、観音像に合掌してご守護を祈る。なお、この堂内には、天台大師、伝教大師のほか毎月30日を守護する仏像が奉安されており、堂内を一巡する形で拝することができることから、参拝者が絶えないという。

大講堂・法華総持院東塔・阿弥陀堂を経て灌頂堂へ

「大講堂」に入堂する前に、堂前で山本師から入堂の心得が説かれる。多くの参拝者が出入りしているほか、この日は曹洞宗永平寺からも法衣の異なる若い僧たちの姿があり、その僧たちが山本師に会釈をして通り過ぎていく。(写真右)



大講堂の内部は広く天井も高い。入堂してから山本師を頂点に座して説明を受ける。大講堂は5年に1度の法華大会や経典講義などに使われているという。本尊に大日如来を祀り、天台大師、伝教大師、聖徳太子、桓武天皇の緒像のほか、比叡山で修行した高僧や法然、親鸞、栄西、道元、日蓮などの各宗派の祖師像が奉安されていて拝礼することができる。



大講堂を出てゆるやかな上り坂を歩くと、右手に幅が10数メートルもあり天空に通じるような長い石段に出会う。この石段の最上段に屋根だけをのぞかせた堂宇が見える。「阿弥陀堂」である。石段は52段ある。人が悟りを開くには52の段階があり、一段一段修行を重ねることにより成仏に至ることができるという。この石段は登らずに坂道に行く。

「法華総持院」の構内に着く。上りきった広い敷地の中央には、まばゆいばかりの朱色に映える「東塔」(写真左)が建ち、自然な気持ちで合掌する。

東塔は法華経1千部、般若心経50万巻などが収められている多宝塔型式の2層の塔である。東塔の右手に、先ほど石段の上に屋根だけ見えた「阿弥陀堂」がどっしりとした姿で構えている。

東塔の左手に、「結縁灌頂」の儀式が行われる「灌頂堂」がある。平屋で静かなたたずまいの建物である。(写真右)



身が引き締まる「結縁灌頂」の儀式

入堂前に山本師から心得が説かれる。堂内は撮影禁止で、儀式であることを意識して私語を慎み、担当僧の指示に従うようにとのことである。

「灌頂」とは、法を伝える重要な儀式で、受け者である僧の頭に香水を灌ぐことから、こう呼ばれているという。現在、一般の人に仏縁を結ばせるために行う「結縁灌頂」、真言の行者になる人のために行う「学法灌頂」、阿闍梨の位を継ぐ人のために行う「伝法灌頂」があるという。

番号順に10数人ずつ控え室で待つ。しばらくして番号が呼ばれ、廊下に整列して担当僧から灌頂手順についての説明を受ける。このとき、僧の説明が聞きにくいほど、控え室で談笑する者たちがいたので、私は思わず「静かにして！」といいながら控え室の襖を閉める。この者たちには「灌頂儀式」を何と心得ているのだろう。こういうときには、傍らにいる僧が嚴重に注意するべきと思う。

僧の案内により、次々と手順が進められていく。縦1列に並び、黒い鉢巻で目隠しをする。前の人の両肩に手を乗せ、経文を唱えながらムカデのように歩く。いくつの部屋をどのように通ってきたのだろう。ひときわお香の香りが強く、ぱちぱちとお護摩を焚く音のする部屋に入る。ここで目隠しをはずす。

部屋の中央でお護摩が焚かれている。それを巡りながら祀られている仏像に合掌する。数人の僧がそれぞれの勤めを無言で執り行っている。

お祓いを受けた後に「投華」を行うため「シキミの葉」が渡される(写真右)。シキミは「コウノキ」または「ハナノキ」ともいい「檜」または「榊」と書く。香気があり「榊」の字のとおり仏前に供えるほか線香や抹香に用いるという。

「投華」は密教の儀式のひとつで、目を閉じて伸ばした手の指先から「投華！」という僧の声を合図に「シキ



ミの葉」を離す。葉が落ちたところが自分と結縁できた仏だという。私が結縁できたのは「釈迦牟尼如来」と告げられる。まさか仏教の開祖である最高聖者「釈迦牟尼如来」と結縁できるとは思ってもいない出来事である。

天台座主による結縁灌頂に感激

終わりに結縁の間に導かれ、正面を向いて椅子にかけられる。正面には仏画がかけられ、一段高いところに天台座主半田孝淳大僧正が皆を見下ろすように椅子にかけられる。落ち着いた物腰や説法には座主として磨き上げた重厚さが伝わり、神々しさが感じられる。オーラというのか。

一人ひとり座主の壇前に進み、右手で半合掌しながら左の掌を座主に向ける。念仏を唱える座主の柔らかく暖かい御手をわが掌に受け灌頂の儀が行われるとき、御仏の慈愛が座主の掌から五体の奥深く滲みこむような神秘的な思いに包まれる。今でも忘れえない体感を味わう。

厳かな灌頂の儀式が終わると、一人ひとりの氏名が記された「結縁灌頂入壇得仏の証」（巻頭頁に掲載）が渡され、確認するよう指示される。奉書の包みを開くと「投華得仏・釈迦牟尼如来・証」には「充」の文字が筆書きされ延暦寺の朱印が押捺されている。さらに「釈迦牟尼如来」のお姿図、投華したシキミの葉がそれぞれ丁寧に奉書包みで入れられている。誠に有り難い「証」を頂くことができ、その感激に体が熱くなるのを覚える。ちなみに、同行した武井善太郎氏は「聖観世音菩薩」を、堤信也氏は「大日如来」を、それぞれ得仏される。



灌頂堂を出ると山本師が待ち受けている。来た道は帰りには下り坂となる。途中に「戒壇院」があり（写真上）、石段を駆け上って参拝する。帰りの道で紅葉のトンネルが、杉の緑とマッチングして映え、灌頂

儀式の気持ちをやわらげてくれる。（右）

延暦寺会館に戻ると閉会式で、法楽は天台宗務総長濱中光礼師により行われる。修了証書授与には滋賀県木村義信氏が代表で受ける。そのほかはすでに机の上に配られていて、それを確認する。昼食をいただいて解散となる。



延暦寺書院拝観写真



鎮護国家の漆塗りの額



論湿寒貧の書



天皇皇后両陛下のご光来写真



水墨画と書の見事な額



山本光賢師の説明を聞く



貴賓室と掛け軸の説明



満拝堂を参拝



大講堂参拝の説明を聞く

2日目後半から群馬教区研修に向かう

延暦寺会館下の駐車場からバスに乗り、午後12時25分に比叡山を後にする。きのう来た名神道をただひたすらに東に向かってバスは走る。多賀SAで小休止、ここで比叡の山並みを見納めして名神道を走る。

このあと、小牧JCTで事件が起きる。中央道への乗り換えを誤り、一般道へ出てしまったのだ。バスの回転できる場所でUターンする。バスはガソリンスタンドで給油することができて災い転じて福となる。

バスは中央道を進み恵那峡SAで小休止をとる。今宵の宿となる昼神（ひるがみ）温泉は次の園原ICで本線を下りる。川沿いの道をくねくねと走る。車窓から見る木々は紅葉が始まっている。

やがて「昼神グランドホテル天心」に着く。川沿いの両岸に開けた静かな集落で、温泉地らしくない温泉地だ。部屋の窓からは、比較的新しい旅館があちこちに見える。聞くところによると中央道工事がらみで誕生した温泉地という。浴場からの展望は明るく泉質も滑らかで心地よい。



(右から堤氏、武井氏、私)

夕食は広間で宴席スタイルである。引率の今村事務局次長のあいさつでスタートする。三浦事務局長は都合できのう帰省したという。男だけの色気のない宴席の終わりには、それほど多くの時間を要しない。



(右から林主任、今村次長、私)

3日目の研修は信濃比叡参拝と元善光寺見学など

3日目（10月31日・晴・温暖）の研修日程は、次のように進められる。

- | | |
|-------------|-----------------------|
| 8:30 | ホテル発 |
| 9:00～9:45 | 信濃比叡参拝（根本中堂・広孫院護摩堂など） |
| 10:15～10:45 | 水引工芸館見学 |
| 11:05～12:05 | 元善光寺参拝 |
| 12:20～13:00 | 駒ヶ岳SA（昼食） |

14:00~15:00	奈良井宿散策（日本一の木曾路宿場町）
18:00	甘楽PA
19:30	群馬教区宗務所着

信濃比叡根本中堂などを参拝

昼神温泉の宿を出てから少し走ると、バスがやっと通れるくらいの上りの山道に入る。まもなく、予定より20分も早く駐車場につく。高さ5メートルもあるかと思われる自然石に「信濃比叡」と彫りこんだ石碑が建ち、不釣り合いに大きな駐車場である。その脇にはこれも大きな茶屋とみやげ屋がある。参拝者が結構あるらしい。

雲ひとつない極上の天気で、日差しがまぶしい石碑を背景に、全員で記念撮影（写真右）。そのすぐ近くに、たたみ1畳ほどもある「信濃比叡」や「法のともし火」のいわれを記した案内板が建つ。



駐車場の脇から山道を10分ほど登ると、広く開けた場所に出る。ここから信濃比叡の境内で、このさき目に入るものは、すべてが真新しい。石畳の参道の先には、澄みきった青空を背にした伝教大師像が建つ。玉石を積んだ台座を含めて高さ12~3メートルもあろうか。さらに参道を上ったところに本堂の屋根が見える。



幅の広い白御影石の石段の上り口に「信濃比叡根本中堂」の文字が彫られた大きな石碑が建つ。（写真左・武井氏と私）石段を5~60段ほど登ると、木の香のするほど新しく、しかし落ち着いた風情の本堂「根本中堂」に着く。その手前には鐘楼が建つ。

本堂に入る。正面祭壇には金色に輝く薬師如来が奉安されている。やがて住職から信濃比叡の由来を聞く。

信濃比叡は伝教大師の遺跡の地

今では中央道園原ICが置かれて、東海と信濃の交通はきわめて至便な地域となっている。しかし、ここ園原は木曾山脈の背骨にあたり、東国と西国を結ぶ東山道最大の難所であった。弘仁8年(817年)8月、伝教大師が布教東往の折、旅人の苦難を見かねて美濃に「広済院」(こうさいいん)を信濃に、「広拯院」(こうじょういん)を建てられた。「広拯」とは広く助ける意で、宿坊として多くの旅人を救ったという。

平成17年10月23日には、信濃比叡本堂(根本中堂)建立に伴い、比叡山延暦寺の「不滅の法灯」が分灯された。平成18年4月16日には、天台座主、瀬戸内寂聴師らを迎え、本堂の落慶法要が営まれた。その様子を撮影したカラー写真が額入りで本堂に掲げてある。

住職の話聞くことで、伝教大師東往のころの話と、目にする境内の施設のすべてが真新しいことの誤差について理解できた。

本堂の左手奥に如来堂(納骨堂)が建つ。如来堂は平成20年8月建立で、本尊の善光寺如来はその折に信濃善光寺より分祀され、同時に脇侍、千手千眼観世音菩薩も篤信者により奉祀されたという。2体とも立派な仏像であり、千手観音は私の干支(子年)の守り本尊であることから謹んで拝礼した。



如来堂を出て坂道を下る途中の小高い場所に広拯院護摩堂(別名・月見堂)がある。こちらのほうが根本中堂よりはるかに古く、石碑や鐘楼も時代を感じさせる。広拯院へ上る石段だけは新しく、少しばかり違和感を覚える。

20段ほどの石段を登り、奥の暗いお堂に手を合わせる。そこに小柄な年配の尼さんが縁に出て、私たちに丁寧にあいさつをされる。この方は、平成21年4月、沼田部の比叡山団参の折に、横川・元三大師堂で角大師のお札を求めたとき、にこやかに応対してくれた尼さんだという。不思議な巡り合わせを感じる。



信濃比叡根本中堂



根本中堂へ上る参道



根本中堂・左奥は如来堂



根本中堂祭壇と薬師如



伝教大師像前で武井氏と



如来堂

生きた白蛇を拝む

広徳院（右写真）を出て坂を下る。道脇のU字溝を勢いよく流れる水が、手ですくって飲みたいほど冷たくてきれいだ。ほどなく先ほどの駐車場に出る。みやげ屋に入り、住職が教えてくれた白蛇を拝する。空調の効いた大きなガラスケースに、洗い砂を敷き詰め、古木を置いた穴の中に白蛇を見た。とても大事に管理飼育



されて、守り神になっていることを知る。本堂でも白蛇のお守りを買って求めたが、ここでもまた2点ほど買う。お守りが好きなのかなと思いながら。

1時間余の信濃比叡参拝を終えて、再びバスに乗り下山する。伝教大師の足跡を、あらためて感じとることができた。

水引工芸館を見学

山道を下ると、やがて風景が街らしい趣に変わる。のどかなしかし起伏の多い山村都市の観がある。飯田に入ってから「天竜川下り」の看板が目に入ることに気づく。天竜川は、長野県諏訪湖を源に長野県の中央部を貫いて太平洋の遠州灘に注ぐ。水量豊富で景観の素晴らしさから古くより「天竜川下り」観光で知られる。そして「蜂の子」や「繭のさなぎ」の甘露煮が珍味で知られる。

やがて「水引工芸館」に着く。小劇場スタイルの舞台で行われる水引工芸の実演を見る。現代生活の中で、「水引」なる代物にはめったに出くわさなくなっている。冠婚葬祭などに使う「たとう」にしても、印刷されているものが一般的になっていて「水引」本物に出くわすことがないくらいだ。

今ではその水引が工芸品として見直され、置物や壁掛などに活用され、その出来映えは見事なものである。大きなものを仕上げるには数ヶ月かかるものもあるという。木曾ヒノキ額装の家紋などは家に飾りたい逸品である。

元善光寺を参拝

水引工芸館を出て20分ほどで「元善光寺」に着く。この場所に来て、私の記憶にあった善光寺とはまったく別ものだと気づく。私の覚えは甲府市にある「甲斐善光寺」であると思う。

駐車場には団体バスが7～8台入っている。石段上り口にひときわでかい行灯看板がかけられている。石段を上り詰めると、本堂前の境内には多くの参拝者で賑わっている。名所なのだ。本堂には「元善光寺」のほかに「本多善光誕生霊地」の大きな額が掲げられている。



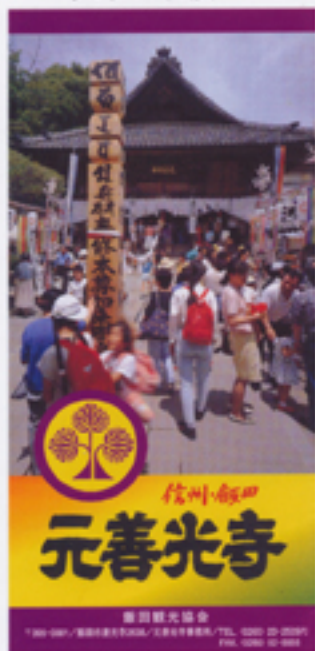
入り口石段



長い石段を上ると本堂へ



本田善光誕生霊地の額



パンフに見る本堂



宝物殿の涅槃像



平和殿の33観音像



平和殿の庭園



平和殿全景

案内されて迷路のような廊下を宝物殿へと進む。立て板に水で説明してくれる住職の口が早いのか、宝物が多くて目をやるのが遅いのか、あまりわからないまま宝物殿を出て、「平和殿」の大広間に出る。開放的なガラス戸から、風光明媚、植栽が行き届いた庭と、その先には飯田の町並みが眼下に広がる。

本多善光卿が難波の堀から如来を救い、生まれ故郷に祀ったのが元善光寺の起源で、長野善光寺の発祥の霊場となる本家本元の霊地という。善光寺の名は本多善光卿の名を以って付けられたものという。

ここではお茶とお菓子が出されて、それをいただく。にこやかな住職が、私たちに改めてご挨拶される。そして、この平和殿の由来を説明される。祭壇に33体の観音様が祀られており、これを拝する。住職から小坊主の絵入り名刺をいただく。何事もユニークだ。

木曾路奈良井宿を散策

元善光寺を出て一般道を北上し、松川IC中央道に入る。まもなく駒ヶ岳SAに入りここで自由昼食となる。雲ひとつない秋晴れの好天に人出も多く、そのうえ昼食時間帯のため駐車場は満杯だ。とりあえず下車してレストランへ向かう。ここでも大混雑だ。何とか昼食にありつける。

昼食後再び中央道に入り次の伊那ICから「権兵衛街道」へと進む。今日、認定道路に個人名をつけた道路は極めて少ない。その昔、木曾福島と伊那谷を結ぶために、権兵衛が私財をなげうって長い年月をかけて開いた道という。一部トンネルも作られているが、今でも冬季閉鎖となる道路という。

奈良井宿には午後2時頃到着、およそ1時間ほど自由散策となる。奈良井宿は江戸幕府が定めた五街道のひとつの中山道にあるひとつの宿場町である。奈良井川に沿ってゆるやかに下りながらおよそ1キロメートルにも及ぶ日本一長い宿場通りである。この地域から起きた歴史的資産保存活動の努力が実り、昭和53年5月には国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。

塗師や檜物師などの職人が数多く、千本格子やひさしの低い家々が連なり昔日の面影を伝えている。名物の漆器、檜物工芸品などの土産店や、茶房、食事所、民宿などが建ち並ぶ。電柱や電線がないので時代劇に見る町並みを歩いている感じだ。時間の都合もあり全部を見ずにUターンする。漆器や工芸品など時間をかけて見歩きすれば面白いだろう。



(日本一長い宿場通りは見どころ満載、泊りがけでゆっくりと見歩きたいところ)



散策を終えて午後3時を少し廻ったころ奈良井宿を後にする。中央本線の鉄路を右に左に見ながら一般道を進み、塩尻ICから長野道に入る。梓川SAで小休止、さらに北上して更埴JCTから上信越道へと順調に進む。東部湯の丸SAで小休止、甘楽PAで下仁田の参加者が下車、群馬教区には予定時間より早めに到着した。そして無事沼田に帰省できた。



昔を思わせる宿場町の情景



(宿場町を歩く武井氏と堤氏)

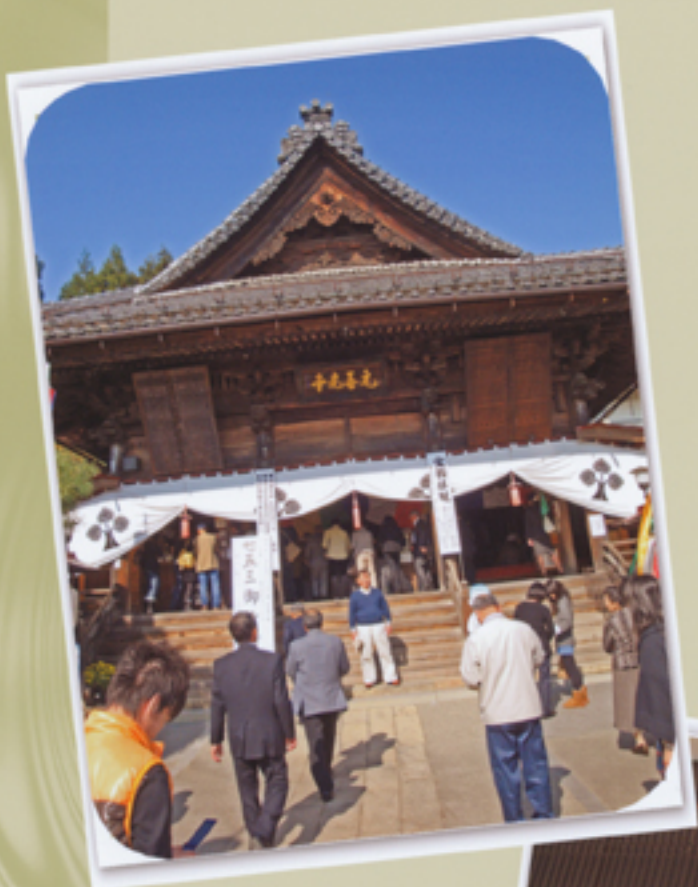
あとがき

今回の壇信徒祖山研修に参加させていただき、まともや新たな体験を得ることができた。それは「伝道師補任研修」とはまったく異なる「結縁灌頂」という儀式である。仏様と縁を結び仏道への精進を意識づける儀式と解すればよいのだろうか。その証として「得仏の証」が付与されたものと思っている。

天台宗祖の地比叡山で、天台座主から「結縁灌頂」を受けたことは、私にとって大変貴重な体験であった。また、信濃比叡では、天台宗祖の超人的な努力の遺跡を見聞することができた。思うに、加齢の一途をたどる凡人が、このような体験修得をさせていただき、はたして役に立つのだろうかと思ってしまう。ともあれ素直な気持ちで先祖の供養に努めることとしたい。末筆ながらご同道いただいた武井氏と堤氏にお礼申し上げます。

平成22年 1月吉日

須藤 充



元善光寺本堂

奈良井宿民宿



アルバム作成 須藤 充